



瑠璃窓

草樂生

淨瑠璃に大寫しにされた素義界の種種相、これは譯言する迄もなく逆も鼻持ちならぬ雙視相と我利相の連續コメデーであつて、三六五日たゞの一日として蒼天を見ぬ濕々した陰慘そのものの世界であるが、時局の潮は滔々と押し寄せて、今や黎明来る——の感、殊更に深きものがある。乃ち遲延ながら品性淘汰が自發的に叫ばれ、顯著な自肅振を發揮しつゝあること。第二に動もすると自己陶醉に墮さむとする演技が傷兵、遺家族慰問行その他の形式によつて銃後、日本精神の涵養鼓吹に少なからぬ貢獻を爲しつゝあると言ふ理由。第三は甚だ手前味噌ながら淨瑠璃一の浪花機關誌が確固たる基礎の上に

置かれて新發足すると言ふ點。この目前に顯れた三つの事象が、如何に斯界の空氣を淨化清澄ならしむるか、の説明は又の機會に譲るとしても、久方振にみる颯爽明朗の氣は筆舌に盡せぬものがある。

一面この郷土藝術の華とも言ふべき淨瑠璃義太夫節の將來又は盛衰に對して果して誰が？何を？啓發し探求するかの問題を少しく検討してみよう。成程、友次郎師の藝は神技に近いものであつて、幾百千の子弟の能し得ない處のものであらう。又、古靱師の演技は國寶的のものであつて珍重これ久しうすべきものであらう。が一の友次郎師一の古靱師をもつて斯道の將來を約束

藝界展望 (二)

◆文樂座 二月一日初日、賽の部「一谷嫩軍記」敦盛出陣(後、雛、友造。つばめ、友平)陣門(長尾、清八、須磨浦(呂賀、寛治郎)組討(佳、吉三郎)脇ケ濱(寛、三浦外、新左衛門)陣屋(前、呂、仙糸。切大隅、清二郎)人形——熊谷(玉造)敦盛小治郎(榮三郎)玉織姫(紋司)相模(龜松、光之助毎日替り)藤の局(政龜)義經(玉市)彌陀六(玉助)

夜の部「關取千兩轡」おとわ(重)猪名川(濱)鐵ケ獄(七五三)廣助「義經千本櫻」道行、靜(伊達)忠信(織)喜左衛門、吉季改メ市治郎外「伊賀越道中双六」沼津(切、古靱、清六、友衛門)「繪本太功記」尼ヶ崎(前、南部、重造。後、織、團六)人形——忠信、重兵衛(榮三)靜、お米(文五郎)鐵ケ獄(玉造)おとわ、操(紋十郎)平作(門造)猪名川(光之助)重次郎(龜松)光秀(玉助)

◆大阪歌舞伎座 一日初日賽の部「假名手

し得るものでは決して無い。第二第三の友次郎師、古軼師が陸續として出現してこそ將來性が有るのであつて、乃ち若手新人の擡頭と、これを圍繞する文樂愛好者の力に俟たねばならぬものが多々あるのである。此の浪花の地だけにても素義人の數は十萬を遙かに超ゆるであらう。この一人一人が月一回の割で文樂座を觀賞しようものなら立錫の隙なき満員札止めは請合である。譽名、改名で花を添へて僅かに盛況の餘蘊を繋ぐ哀調を見事解消するのは大阪人の、殊に文樂人を以つて任ずる素義人の當然負はさるゝ責務と言はねばならぬ。悲問よく聴くことである。『今月の文樂は何麼だんネ』あかん、聞き應へのあるのは一つもあらへん、ヤメトキ」實に啞然たらざるを得ない。これが苟くも素義人を以つて任ずる輩の眞摯な言葉であらうか。頑迷にして無爲無識、淨界を毒し、藝術を冒瀆するこれに過ぐるものはないであらう。誰某の舞台には眞技と戯技の日がある

等と物識り顔に語る者がある。が果して左様な人を喰つた欺瞞があつては溜るものではない。演技者が人間である限り其日々々の出来、不出来は當然あつて然るべきではあるが観客層によつて意識して眞戲を同値にひさぎ尙且つ酒々たるものがあれば藝道も終りである一管一彩を忽にせぬ畫家の良心的作品をとつて演技に律することは當らぬかも知れぬが、少くも名人上手の域にあるものの、演技の中には尊き良心の閃と生死を超越する體當り精神の何者かゞ仄見へてゐる事を忘れてはならないと思ふ。

精根を盡した演技、これ程尊いものはない。其處には巧拙を超越した恐ろしい迫力が渦巻いて観客にある種の満足感を抱かしめる。名人、上手となると迫力は更に緊迫する。満足感は陶醉となり、無我となり神秘に入る。吾々が藝術を尊び、藝術家を崇敬する所以も其處にあるのだと懷ふ。此位にして次號でウンと毒舌(?)を奮つて見やう

本忠臣蔵 瀧美清太郎演出、夜の部「菅原

傳授手背鑑」寺子屋「梅ヶ枝」(文樂座、南部、越名、松之輔外出演)「うぐひす」

「小原女奴」金子洋文作並演出「白梅記」近頃

河原達引「四條河原より與次郎内迄、梅玉

我當、市藏、壽三郎、箕助、又一郎、魁車

富士郎、凱雀、延若

◇東京歌舞伎座 一日初日、一月と同様狂言、顔觸れにて延長興行

◇明治座 一日初日、巖谷三一作並演出

「仇討三日間」壽式三番叟(文樂座、相生

源、文、道八、吉五郎外出演)金子洋文作

並演出「權三と助十」猿之助、芝鶴、段四郎

建升、八百藏、勘彌、壽美藏

◇東京劇場 一日初日、佐々木孝丸作「銀

婚式」眞山青果作「元祿忠臣蔵」吉良屋敷貴

門「鳴神」「一本刀土俵入」前進座

◇竹本春太夫逝去 一月十一日逝去、享年

七十一。

謹告

本誌第四百十七號は都合により二、三月合併號と相成候に付御諒承願上候
三月十日

浮瑠璃雜誌社